慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	格差社会では親が厳しい? : 子育てスタイルの経済学
Sub Title	Do unequal societies have more pushy parents? : the economics of parenting style
Author	Zilibotti, Fabrizio
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2018
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.110, No.4 (2018. 1) ,p.387(27)- 412(52)
JaLC DOI	10.14991/001.20180101-0027
Abstract	心理学で子育てスタイルを専制型, 迎合型, 権威型の3つに分ける考えがある。専制型の親は子が議論せずにルールに従うことを求めて不服従を罰する。迎合型の親は子にすべてを自由に決めさせる。権威型の親は子が議論することを許すが子に影響を与えようとする。ジリボッティ教授はどのような経済条件で親がどの子育てスタイルを採用するかを決定するかについての理論を構築し検定する。彼は多くの国々での趨勢は, 経済不平等の拡大とそれに伴うより大きな人的資本の収益率により, 子の経済的成功のためにインテンシブな権威型の子育てスタイルを採用する親が爆発的に増えていることを示す。日本のように経済不平等が比較的に小さい国では親はもっと迎合的である。ジリボッティ教授は世界価値観調査の国際的なデータから理論に整合的な実証結果を示している。 In psychology, an idea of different parenting styles of authoritarian, permissive, and authoritative, has been used. An authoritarian parent expect children to follow the rules without discussion and punishes disobedience, a permissive parent lets children decide everything, and an authoritative parent allows the child to make decisions but tries to influence them. In this lecture, Professor Zilibotti proposes and tests a theory where economic conditions determine which parenting style will be adopted by a parent : he shows that in many countries the trend of increasing economic inequality with a high return on human capital has led to the explosion of an intense authoritative parenting pushing children into economic success. In countries with lower inequality like Japan parents are more permissive. Professor Zilibotti shows that the evidence from international data of the World Values Survey is consistent with the theory.
Notes	著名学者招聘講演会
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20180101-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」110 巻 4 号（2018 年 1 月）

著名学者招聘講演会

格差社会では親が厳しい？

——子育てスタイルの経済学——

ファブリツィオ・ジリボッティ *

Do Unequal Societies Have More Pushy Parents?

The Economics of Parenting Style

Fabrizio Zilibotti *

Abstract: In psychology, an idea of different parenting styles of authoritarian, permissive, and authoritative, has been used. An authoritarian parent expect children to follow the rules without discussion and punishes disobedience, a permissive parent lets children decide everything, and an authoritative parent allows the child to make decisions but tries to influence them. In this lecture, Professor Zilibotti proposes and tests a theory where economic conditions determine which parenting style will be adopted by a parent: he shows that in many countries the trend of increasing economic inequality with a high return on human capital has led to the explosion of an intense authoritative parenting pushing children into economic success. In countries with lower inequality like Japan parents are more permissive. Professor Zilibotti shows that the evidence from international data of the World Values Survey is consistent with the theory.

Key words: Family altruism, human capital, inequality, intergenerational preference transmission, parenting style, paternalism, world values survey

JEL Classifications: D10, J10, O10

This lecture transcription is a Japanese translation of the Keio Economic Society Lecture given by Professor Fabrizio Zilibotti (today at Yale University) on December 24, 2015. The lecture was based on his joint research with Matthias Doepke that was later published as "Parenting with Style: Altruism and Paternalism in Intergenerational Preference Transmission" by *Econometrica* in 2017 (Vol. 85, Issue 5, pp. 1331–1371) and that will be covered in their book in preparation for Princeton University Press (expected publication in the fall 2018).

* イェール大学経済学部
Department of Economics, Yale University

ご紹介くださいまして，ありがとうございます。今日は慶應義塾大学で話をする機会をいただきましたことをとてもうれしく思います。ご紹介がありましたようにドゥプケ（Matthias Dopke）先生との共同研究の内容をご紹介する内容となっております。論文と，そして書籍を執筆しております。個人的な経験から起因して派生した研究です。お互いによい親になるためにはという話をもちろんしています。

私には娘がいます。17 歳です。そしてドゥプケ先生は子供が 3 人います。アメリカのシカゴで子供たちは育っていますが，私の場合にはイタリア人で娘はスウェーデン，その後イギリスに行き，またスウェーデンに戻り，今はスイスで暮らしています。

私たち 2 人に共通していましたのは，自分自身の親たちとは違う親になったということだったんですね。お互いに非常に幸せな家族を持っています。親からの愛情も十分浴びてきました。しかし，実際，私たち自身が子供たちに向き合っているときよりも，私たちの親はもっとリラックスした形で子育てをしていたと感じるんです。

1960 年代から 70 年代初頭まで記憶をたどっていきますと，私たちの親は学校でちゃんとやっていれば大丈夫だと考えていたらしく，部屋で自由に時間を過ごすこともできましたし，親の介入もほとんどありませんでした。親が気にしていたのは私たちの幸せ，喜びだったわけです。

もちろん，私たちも自分たちの子供がハッピーでいてほしいと思いますが，もっと将来のための備えをしてほしいと考えてしまいます。例えば課外活動で音楽を学んでほしいとか，あるいは新聞を読んでほしいとか，そういったようなことを考えるわけです。そこで，その話をしていると，私たちが若いころ育ったときの社会は，今とは違うのかなということになりました。

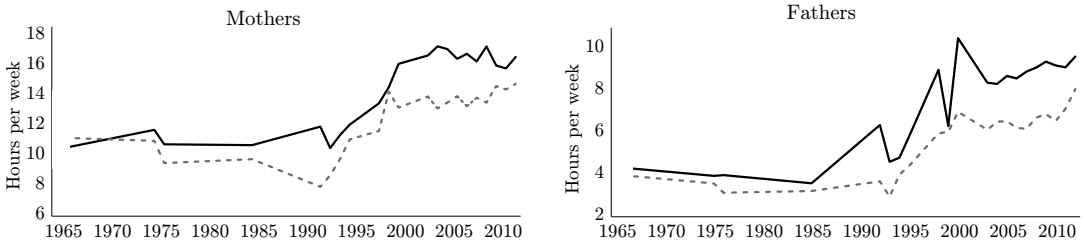
実際ヨーロッパでは特に 1970 年代，オポチュニティーというのはありましたが，機会の実現というのは平等であったと言えます。失業率も低かったので安心感があったと思います。1970 年代以降，徐々に事態は悪化して厳しくなってきましたが，それまではリラックスした空気がありました。今の社会は，より競争が激化してきました。学校の選択も含めてです。

もちろん，国によって違いはあると思います。例えばアメリカ（米国）の場合は，よりその影響はヨーロッパの国々と比べると大きいと思われます。しかし，いずれにしても世界は全般的に競争が激しくなってきていると思います。

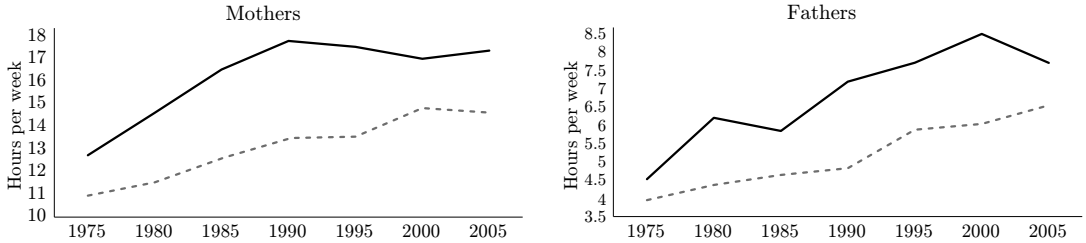
そして社会科学者としての原則は，自分の内省に基づいて理論を構築してはいけません。たった 2 人の意見だけで話をするのは，サンプル数が少な過ぎるというわけです。

そこでサンプルをもう少し広く見てシステマチックなデータを参照してみました。スライド 1〜3 を見ますと，インテンシブ（子育てに多くの時間を集中的にかける）な親になっているのは決して私たちだけではない。我々の親と比べてですね。実際にはもっと一般的なパターンとして，実は私たちが調査をして，十分な統計データを得ることができたすべての国において，このパターンが見られるようになったということが分かりました。

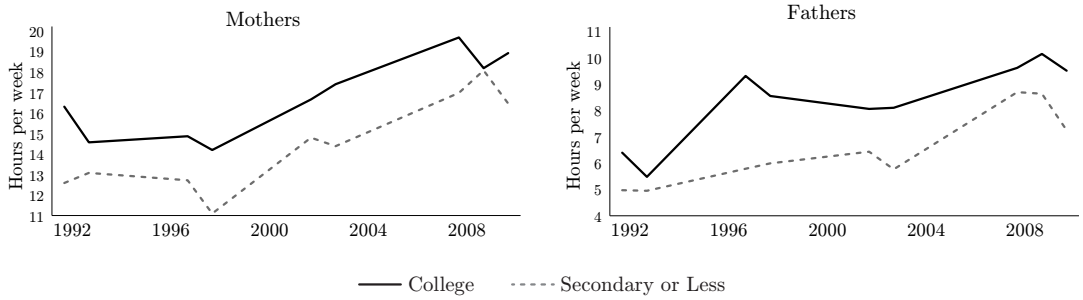
スライド 1　Time use for Childcare of Parents: United States



スライド 2　Time use for Childcare of Parents: Netherlands



スライド 3　Time use for Childcare of Parents: Spain



例えばアメリカにおける育児に割く時間を 1970 年代から今日まで比べてみますと，ご覧のように 1970 年代，母親は週に 10 時間ぐらい育児にかけていた。しかし，今は教育レベルによってということになりますが（この教育レベルについて，また後ほど触れたいと思います），14 時間から 16 時間かけています。

一方，父親による子育てへの関与は非常に低かったけれども，今はよりジェンダーイコールな社会になっています。1970 年代，育児への関与が非常に短かったわけですね。しかし，そこから比べますと，育児に割く時間がずいぶん増えてきています。このパターンがアメリカではかなり顕著に見られます。

それ以外の国，例えばオランダあるいはスペインを見ていきましょう。この傾向は同じように見られるということが言えます。もっと多くの国からの情報の収集をしたいと思っています。しかし，これだけの年数にわたるデータの収集ということになると限られた国になります。

これは 1 週間当たり子育てにどれくらい時間をかけているかということです。子供 1 人当たりと

いうことではありません。出生率が低くなってきていますので，子供 1 人当たりということで考えると，やはりその密度は濃くなっていると言ってよいかと思います。この状況，現象，すなわち父親も母親も，その子供の生活にかかわる時間が増えているということ，それは例えば教育面も，あるいは感情的な面も，あるいは価値観を守るという意味でも起こりました。例えば私の両親であれば，私に質問しなかったようなことであっても聞くようになっている。これは国によって異なる呼び名が付いています。どうやら日本では，私の知りましたところ「教育ママ」という言葉が使われているようですね。日本の文化の一部としてあるということを聞いています。

中国の場合には「タイガーマザー」ということが話題になっていますし，またロシアでは「グリズリーファーザー」と呼ばれています。アメリカでは「ヘリコプターペアレント」という言い方が聞かれるようになってきています。こういった呼び名というのは，心理学者のティーンエージャーの娘が母親に対して不満を感じ，頭上をまるでヘリコプターのように飛んでいるような気がしたということで，過保護な親に対して「ヘリコプターマザー」と言うようになりました。2012 年 6 月，『ニューヨーカー』に使われた表現です。決して危険ではないような活動をしているときでも，親は過保護に見守っているということを表現しています。ウェブサイトなどを見ますと，どうやら日本ではこのようなことがよく話題になっているようです。モンスターペアレントという言い方があるとも聞いています。モンスターペアレントというのは，教師に対して非常にデマンディングのようですね。これもやはり新聞を読みながら知ったことですけれども，まったく理不尽な要求を学校の教師にするということで，学校の教師がかなり絶望的になっているというようなことを聞きました。

例えば福井の保護者の方が，家族は朝起きるのが得意ではないので毎朝寝過ごさないように電話をください。あるいは東京のある保護者は，私の娘はプロのピアニストになるためにプライベートレッスンを取っているので，休憩時間に外で遊ばせないでください。指をけがさせてはいけないので，というわけです。いかに過保護であるか，そして課外活動があることによって非常に心配をしているわけです。

これは完全に一時的なことで，もしかしたらこれからなくなっていくことなのかもしれません。あるいは親というのは，こういうものなのかもちょっと分かりませんが，このような非常にインテンシブな子育てをすることによって，どういう影響があるのかというのを見ていきたいと思います。

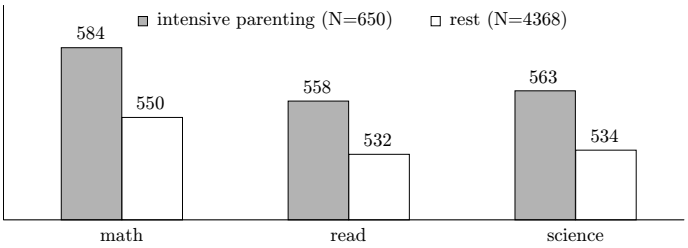
こちらのスライド 4，これは韓国のデータです。日本のデータをご紹介したいと思っていましたが残念ながらありませんでした。PISA 調査，皆さんの中にはご存じの方もいらっしゃるかと思います。15 歳で調査を行います。同じ調査を各国で行います。数学，そして読解力，科学の力を試す調査内容となっています。

国によっては PISA 調査によって，子供からのアンケートという形で調査を行うというところがあります。そして，その調査に参加した子供の保護者からのアンケート調査に基づいて PISA 調査をまとめているところがあります。こちらは韓国のデータなんですが，ヒストグラムです。青で示

スライド 4　Intensive parenting affects test scores

PISA Scores and Parenting

South Korea



Source: PISA 2012

Parenting is classified as intensive when parents:
- discuss with teacher on own initiative,
- discuss child' s wellbeing at school at least once or twice a week,
- simply talk with child at least once or twice a week,
- discuss performance math at least once or twice a week.

TRUE FOR ALL COUNTRIES FOR WHICH INFORMATION IS AVAILABLE
(*NOT ONLY KOREA, JAPAN IS NOT AVAILABLE*)

されているところ，こちらが親がいわゆるインテンシブ子育てを行っている親の子供の数字ということになります。

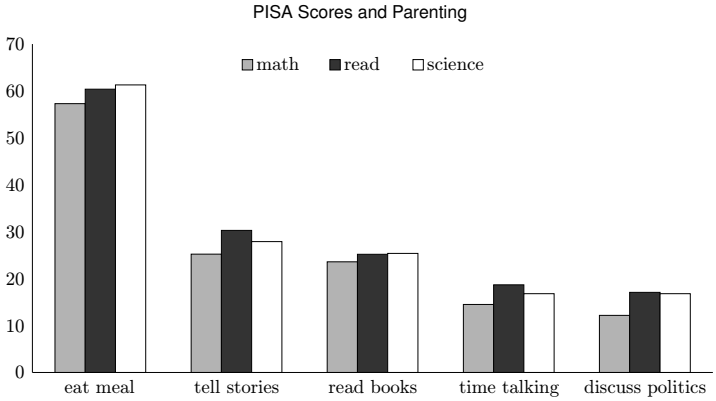
何によってインテンシブ子育てと呼ぶのかなのですが，いくつかの質問項目を見ていきました。親に問われた質問項目です。そして，いわゆるインテンシブ子育て，子供のことにすごく深くかかわり，いつも心配している，こういった保護者の特性と近いものとを併せて見ていきました。

例えば親が主導権を取って教師と話をするとか，あるいは子供と話すのは週に 1 回か 2 回。あるいは子供の学校での生活が心配であるため，少なくとも週に 1 回か 2 回か学校に問い合わせをするとか，あるいは週に 1 回か 2 回，数学などの成績について話をするという，こういった質問項目に対して非常にそれをよくやっていますという場合には 1，そうじゃなければゼロという形で評価を行いました。

5,000 のうち 650 件の回答者がインテンシブ子育てということです。私やマティアスのように子供の心配をよくしている保護者ということになります。その結果を見ていきますと，大きな差があることが分かりました。エコノミストと話をしていますので，これは非常にまじめなエコノメトリックスの取り組みではなく，これは因果関係の証拠という形ではお話はいたしません。これを相関関係としてご覧いただきたいと思いますが，非常に興味深い相関関係が出ていると思います。親の所得，そして教育に関する情報も得ています。

ここで数学のスコア，違いをご覧ください。34 点の差が開いています。PISA 調査というのは 600 が最高点です。上海の生徒だけが 600 点を取っています。しかし，アジアの生徒は比較的点数は高いです。韓国も日本もよいスコアを得ています。

スライド 5　Activities with children affect test scores



Source: PISA 2009

Average effect on PISA scores across 15 countries, controlling for country fixed effects

550，これがインテンシブ子育てではない子供たちの平均的な得点です。韓国の生徒としては，これは決して高い数字ではありません。そして，インテンシブ子育てを行っているという保護者の子供に比べると 34 点も開きがあります。34 点という開き，これは例えば，私が，今，住んでいる国，スイスの子供たちの平均的な得点，そしてフランスの子供たちの点数を見ていきましょう。スイスはヨーロッパで最も高い得点を数学で上げています。これは私も確認しました。スイスの子供たちは，実は日本の子供たちよりはわずかですけれども平均は上回っています。でも科学は低いです。

一方，フランスは中間ぐらいです。フランスの新聞では，このパフォーマンスをあまり高く評価をしていません。そのスイスとフランスの差ぐらいの差がこの 34 点ということなわけです。ですから大きな差だと言えます。

そして，もう 1 つ，スライド 5 をご覧ください。また PISA 調査で 2009 年の調査結果，先ほどのは 2012 年の結果でしたが，こちらは 2009 年です。先ほどの韓国のものは 2012 年の結果でした。ここでは子供たちに対する質問の中で，このようなインタラクションを親と持っているかどうかを聞いています。この中で重要なのは親と一緒に食事をしているかということです。ひょっとしたら文化による違いがあるかもしれません。例えばイタリアなどでは，ほとんどの家族が一緒に食事をします。アングロサクソン諸国ではそれほどではありません。

このような差は，国によって特定の違いがあります。各国の特定な差，例えば 15 カ国に関してデータがありますが，この中で一定の一般的な文化的な差異というのは取り除かれています。例えば東アジアの子供たちの方がヨーロッパよりも，あるいはアメリカの子供たちよりもテストスコアでは平均的には高くなっています。こういったところでコントロールをしています。

また所得，あるいは親の学歴でコントロールをすると，また異なる結果が出ます。例えば大学卒の両親で見ますと，毎日子供と食事をすることと，数学，そして読解力，科学との間でより高い相

関が出てきます。

例えば 60 ポイントぐらいの相関関係が示されます。因果関係の推定とは言いたくはありませんが，非常に大きいのではないかと思います。家族で一緒に過ごす時間が長いなど，さまざまな要素が関係してくると言えます。しかし，例えば政治の話をするとか本を読むとかに至るまで，子供とのさまざまなインタラクションがあることが，この PISA 調査における高得点と密接に関係があるということです。

それでは，このような観察からモチベーションを得て，今日はこのようなことについてお話をしたいと思います。経済理論を用いることで，どのようにして社会的な現象を理解することができるのかということです。そして，また時と場所によって子育てのスタイルが異なるのはなぜなのか。

例えば先ほども言いましたように，私と比べて，私の親の子育てというのは異なるものでした。また私の祖母，祖父母も，やはり私の両親とは異なる子育てをしていました。私の両親からの話では，もっと厳格だったということなんですね。なので，祖父母の代は，子供に何をすべきか，すべきではないかというのを説明もなくしていました。私の両親はもっとリベラルでしたので，私も比較的リベラルとは思いますが，子供に対しては自分の両親よりも，なぜこっちの方がよいのか説得しようとしている姿勢が自分には感じられます。

そして，また経済因子を使うことによって，近年ヘリコプターペアレントが増えてきていることを説明してみたいと思います。また子育ての方法論が社会経済的な環境に影響を受けているのであれば，どのように影響を受けているのか。例えば経済的な不平等との関係についても見ていきたいと思います。そして，ここからはこのような流れでお話ししたいと思います。

まずは子育てスタイル，この数世紀にわたっての進化を見ていきたいと思います。そして，その後，人の行動に対する経済的アプローチ。そして子育てスタイルの理論をいくつか見ていきたいと思います。あまり技術的なプレゼンにはしないようにと言われていますので，もしもっと詳しく知りたいということであれば，論文をマティアスと私で執筆したものがあって，ウェブページからもご覧いただくことができます。より科学的でかつ技術的な論文となっております。そちらもご一読いただければと思います。

発達心理学がこの子育てスタイルについてどのように取り上げているのか，これについても見ていきたいと思います。これは決してエコノミストとして話をすることは期待されないかと思いますが，なぜエコノミストの視点から話すことができるのか，これについても触れたいと思います。

そして経済理論という観点から経済環境が変わっている中で，親の態度が変わるのはどうしてなのかということについても触れたいと思います。親がどのような子育てをするかというのを選ぶときには，それは決して冷たいプロセスではなくて，例えば自分の子供はもっと権威主義的になるのか，もっとリベラルにあるべきなのかと考えるのではなくて，もっと無意識的なものだと思っています。無意識的に選んでいるものだと思います。

そして，その後，経験的な証拠という形で私の理論の予測について話をした上で，将来の社会の進展に子育てスタイルがどういう影響を及ぼしていくだろうかということについても触れたいと思います。少し歴史を振り返ります。

さまざま文化を見てみました。私は率直に言いまして，日本における子育てスタイルの歴史は分かりません。最近の状況については読みましたけれども，あまり歴史については詳しくありません。しかし，人類の歴史を通じて，親というものは，子供は合理的な選択をすることはできないので，一定の行動をするように矯正するべきである。もしその矯正がされなかった場合には体罰をさせるべきであると。この矯正をするということ，これがよい親であることの一部であると見られていたようです。

今日はクリスマスイブということで，いくつか聖書から引用したいと思います。一番上の引用ですが,「むちを惜しむ者は子を嫌い，子を愛する者は努めてこれを懲らしめる」。そして 2 つ目,「愚かさは子の心に固く結び付いている。しかし，規律のむちで遠くへ追いやるだろう」。まさにその権威主義的な感じですけれども，聖書は古い本ということもあって，こういった形となっています。

もう少し最近の，例えばジョン・ロックを見ていきたいと思います。近代のリベラリズムの父といわれています。かなり開放的な考え方であったと思います。少し前進的な考え方を育児に関して書いています。「自由とわがままは子供に何もよいことはしない。分別を求め制限と規律を必要とする」。

そしてメタスタディーが J. H. プラム（J. H. Plumb）によって行われ，1975 年に本が出版されています。それによりますと，1770 年以前の子育てに関する 200 のアドバイスのうち，父親が子供を殴ることを勧めなかったのはわずかに 3 つです。

まとめますと，かなりシンプルで，かつ，明確だったと思います。親は子供たちを何世紀にもわたり非常に厳格に育ててきました。選択の自由はありませんでした。子供は自分たちで合理的な選択をすることはできないものだと考えていたわけです。

また親が考えていることが正しいのだということを子供に納得させるという考え方もありませんでした。これも私の両親がその親，すなわち私の祖父母について言っていたのとまったく同じだなと思います。まったく説明もなく指示されていたという空気がありました。

それでは，ここまではずっと話をしてまいりましたが，面白い映画をご覧いただければと思います。スウェーデンの有名な監督，イングマール・ベルイマンの作品です。スウェーデンがかつてどうだったかを示すようなものです。

スウェーデンは，今は子育てに関しては，最もリベラルな国の 1 つですけれども，この男性は主教です。若い人と結婚します。その妻となった人の家族は非常にリベラルな家族でした。アーティストの家族ということもあって非常にリベラルでした。そして，その息子であるアレクサンデルは非常に厳格で，伝統的な教育をするこの義父，主教と衝突をします（訳注：ここで映画『ファニーと

アレクサンデル』（1982）よりヴェルギルス主教が絶対に謝らないと言っているアレクサンデルを鞭で打って謝らせる場面のクリップが見せられた）。ヴェルギルス主教はアレキサンドルを愛していると主張しました。アレキサンドルが謝罪することを求めました。アレキサンドルが心から謝っているのかどうかではなく，謝ったことが大事という感じです。

このような子育てというのは，ジャン=ジャック・ルソーは認めません。時の流れとともに変わってきました。18 世紀の末から変わっていったのです。ジャン=ジャック・ルソーは『エミール』，あるいは教育に関する論文の中で，教育者および両親は子供の自由，そして規律を与えることに対して介入するべきではないとしています。熱心な教師に対してシンプルで聡明で，あと寡黙であるべきであるとしています。子供は罰せられるべきではなく，自らの過ちの自然な結果として，その反省をすべきであると言っています。

ルソーの考え方，そして，そこからの啓蒙によって，その後ヨーロッパ，そしてアメリカにおける教育の改革者の動きに勢いをつけました。普通教育が広がっていく流れの一方で，専制型の子育てというやり方が変わっていきました。この動きは実はいくつかの特定の学校の教育システムの中に影響を及ぼしてきましたが，依然として，それはマイノリティーでした。少なくとも 20 世紀半ばに至り，そこから子供に対し専制主義的な立場は続いたわけです。しかし，1960 年代，70 年代に変わっていきました。それは子育てにおいて，また教育においてもです。

イギリスが 1972 年に調査を行いましたけれども，子供たちは幸せで明るくて楽しくてバランスが取れていなければいけない。そして学校の勉強を楽しみ，自分の達成したことに満足を感じなければいけないという調査結果でした。

私も当時子供だったわけでして，その後ヒッピーになることはありませんでしたけれども，ヒッピー運動も専制主義に対する反対の動きとして出てきました。ピンク・フロイドは教育も思想統制も必要ないと歌っていました。そして，それに伴っていろいろなほかの変化もありました。多くの国で体罰が禁止されました。違法とされました。

スカンジナビアでもスウェーデンでは，1979 年に早くも体罰が禁止されています。体罰について私の場合には，それよりももう少し長く続いていたかと思いますけれども，それほど厳しい体罰ではありませんでした。それからフィンランド，ノルウェー，オーストリアでも 1980 年代に体罰が禁止されまして，また 1996 年から 2008 年のドイツの親の縦断的な研究でも，体罰がだんだん減ってきていることが示されています。

違いは国によってあると思います。日本ではどのぐらい頻繁に体罰が行われているか分かりません，違法とはなっていませんけれども。またフランスやスペインなどの場合には，親が例えば子供に体罰をするということは見られますし，国によって違いがあります。

1970 年代，80 年代というのは，リベラルな子育てが中心になってきた時代です。そして，そこからまたさらにもう一度潮目が変わったようです。マーガレット・サッチャー時代，つまり 70 年代

の終わりから 80 年代の初頭に，また反動的な動きが出てきました。あまりにも自由放任主義が学校でも過ぎるのではないか，家族においても家庭においても，自由放任主義過ぎて成績不振に陥っているのではないかと言われるようになりました。

このような新しい考え方，インテンシブな子育てのシンボルとなったのがエイミー・チュア教授です。イェール大学の教授で本を書いています。とても面白い本なんですけれども，『Battle Hymn of the Tiger Mother』という本を書いています。そして厳しい中国流の子育てをするべきだと主張しています。欧米の親は子供たちの心理状態，それから自己尊厳ということをとても心配していると思います。中国の両親，あるいはこれは移民だからなのかもしれませんけれども，子供はもろいのではなくて強いと考えているので，子供に対してまったく違った態度を取ります。チュア教授のビデオをお見せします（訳注：エイミー・チュア教授のビデオが見せられた。チュア教授は「それは期待が高いということでしょうか」という質問に対し「そうですね，例えば学校から子供が帰ってきたとき，例えば私の娘のルルは，10 歳のころ数学の試験でとても悪い成績を取ったことがありました。算数を失敗しちゃった，大嫌いと子供は言いました。アメリカの多くの両親は，あなたはほかのことをできるんだから算数はいいのよ，それは別に心配しなくていいわと言うかもしれません。でも，私はそんなことは受け入れられません。1 週間ドリルを一緒に作って娘と勉強しました。翌週には試験の成績がよくなりましたし，その後は数学の天才と友達に言われるようになって，今では大好きな教科になっています。」と語った）。

今のがエイミー・チュア教授です。

何を達成しようとしているのか，マティアス・ドゥプケと私の共同研究で子育てスタイルについて取り上げて何を証明しようとしているのかということですが，すでに知識がある人も，知識がそれほどない人も，子育てについてはたくさんの本を出していますから，私たち 2 人が子育てのアドバイスをする必要はないと思いますし，2 人とも大してアドバイスできることはないと思っています。

なぜ本を書こうとしているのか，つまりよい親であるためにどのような子育てをするべきかという本ではなくて，社会的な現象を取り上げようとしています。つまり経済学者として親がなぜこのような行動を取るのか，そのインセンティブは何か，国によっても時代によっても行動は違うけれども，その原因は何かということを追究したいと考えています。

先ほども少し触れましたけれども，これは伝統的には経済学の研究の対象となっている分野ではありませんで，社会科学の別の分野で親の行動についての研究が行われています。そして分類が行われています。これはダイアナ・バウムリンドの 1960 年代後半の研究による分類ですけれども，子育てスタイルについて 3 つの分類をしています。専制型（authoritarian），権威型（authoritative），それから迎合型 （permissive）です。これらの言葉は訳すのが難しいこともあります。そういった言葉がないと。イタリア語では訳せるのですけれども，国によってはこれに該当する言葉がなかなか見当たらないという国もあるようです。

そして，これは良い子育て，悪い子育てということを言おうとしているわけではありません。良

い親，悪い親といったような分類を取り上げようとしているわけではありません。例えば子育てを放棄するようなネグレクトや，社会問題，薬物中毒，そういったことを取り上げようとしているわけではありません。

あるいは壊れた家族，機能不全に陥った家族などで，親がきちんと親としての責任を果たしていないということを言いたいのではなくて，ほとんどの親は子供を愛しているけれども，しかしながら子供にとって良い子育ては何かという考え方が違っているということを取り上げようとしています。

ダイアナ・バウムリンドもまさに同じことを考えて，このもともとの分類ではネグレクトをする親は，また別の分類になっています。専制型の親というのは子供に服従を求める。そして，またとても厳格に管理をする。そして，これをしてはいけない，あれをしてはいけないと禁止をする。また体罰をしがちともとらえられています。個人的に私は子供の体罰は好みません。しかしながら，だからといって世界中のすべての親で，体罰をする親が悪い親だと言うつもりもありません。子供を愛していないと言うつもりもありません。それが子供に対する正しい方法なのだと考えてやっているのでしょう。けれども，こういった専制型の親というのは，自分の行動については説明をしようとしません。私が言っているからやりなさいという形です。

また権威型の子育てというのは，アカデミックな家庭に典型的に見られるでしょう。子供に対して影響を行使しようとする考えにオープンであるように見られますけれども，子供には自分たちがこうしてほしいと思うことをやってほしいとも考えています。

ですから理由をきちんと説明をするというような形で，子供の考え方に対して，こうしてほしいということを説明して考え方を変えようとする。うまくいくときも，うまくいかないときもありますけれども。

また迎合型というのは，子供たちが自分で選ぶことを認めている。そして罰したりすることはしないで，許容をして肯定的な子供に対して向き合う，子供の衝動，欲求行動を受け入れるということをしています。

経済学は，例えば企業の生産活動であるとか，消費者の需要であるとか，貿易について，あるいは公共政策について，政府について，金融市場について，経済成長について取り上げる学問と思われてきました。しかし最近の経済学は，社会科学では，経済学の帝国主義などと恨みを込めて呼ばれるようにはなっていますが，伝統的には，ほかの人文科学，あるいは社会科学，例えば歴史や政治学，社会学，心理学の分野にも研究対象を広げています。私は家族経済学に興味がありますけれども，数年前に民族紛争についてのプレゼンテーションを行ったこともあります。

では経済学的なアプローチというのはどのように定義されるのでしょうか，ほかの社会科学と比べて何が経済学的な手法なのでしょうか。共通する点はあります。つまり人間はインセンティブに反応するということです。インセンティブのシステムがあって，それにさらされていると，人間はそれに反応して行動を調整するという考え方が共通です。

そして人間というのは費用と便益を比べてみて，それにのっとって決定を行うということです。十分に情報がないかもしれません。選択肢についてあまり情報がなく，限られた情報で決定をしてしまうかもしれません。しかしながら選択肢を選ぶに際しては，インセンティブに基づいて選んでいるということです。

ちょっと立ち戻って，親であれば，あるいは息子，娘であれば，言わないでも自明のことかもしれませんけれども，親と子供というのは物事のとらえ方が違います。これはもう子供が幼いときからそうです。親がやってほしくないということを子供はやりたがります。子供は自分がやっていることを十分に認識していないせいなのかもしれませんけれども，小さい子供は例えば喜んで危険を冒そうとする。そして親は，そういったことをやってほしくないと思うことが多くあります。

ティーンエージャーについては，またちょっと違った問題がありますけれども，ティーンエージャーは夜遅くまで外で遊びたい。親はもっと勉強してほしいと思っているのに友達と一緒に過ごすことを好む。あるいはストリートドラッグに手を出してしまったりというようなことが見られます。

親は子供の経験について一定の評価をしていますけれども，親のレンズ，大人の考え方のレンズを通して評価をしています。子供は幸せなのか，子供が幸せならそれを尊重しなければいけないといった考え方ではなくてです。経済学者はしばしば個人主義を取って，誰もが一人一人の個人として選択をするべきだと考えるのですけれども，しかし，子供のことを考える場合には，親が子供のために考えてもよいというような譲歩をしがちです。

またいくつか共通の要素があります。親というのは子供の決定の将来の帰結について，より多くの価値を見いだします。そして子供は社会的にどのような帰結が待ち受けているのかということにあまり重みを置きません。親の方が子供の将来について，より重視しています。それも対立の原因となっています。

では，それをもう少し経済学的な専門用語に置き換えてみたいと思います。一般的には人々は効用関数の最大化を行おうとします。数学的に厚生，あるいは幸福を達成しようとすることを効用の最大化と言います。そして，また何度も自分もこういった状況を考えてきましたけれども，同じ人間でも２つの考え方があります。まず利他主義的な考え方をする。子供には幸せでいてほしい。子供が楽しんでほしいという考え方があります。子供は幸せでいてほしい。しかしながら同じ人間が家父長的（パターナリスティック）な考え方を取る。つまり子供の行動，あるいは子供の選択肢というのが親の考え方に沿ったものであるようにしたいと同じ人間が同時に考えるのです。そして子育てスタイルにはこういった２つの自己がある。親にも２つの自己があるということです。そして親はこの２つの衝動のトレードオフを行っています。

より家父長的な親であれば，もっと子供に対して，その行動をコントロールしようとします。それはいろいろな理由があるでしょう。なぜ家父長的である人と，それほど家父長的ではない人がいるのか，生来的な違いもあるかもしれませんが，それには立ち入りません。

スライド 6　The Economics of Parenting Styles

In economics, we use utility functions and budget constraints to figure out the optimal choices of individuals. Example

- two consumption goods, c_1 and c_2 at prices p_1 and p_2
- and income (money) m

A typical problem:
$\max\{c_1, c_2\}\, U(c_1, c_2)$ subject to $p_1c_1 + p_2c_2 = m$

We (sometimes) separate the utility function in two utility functions, one for each good:

$$U(c_1, c_2) = u(c_1) + \beta u(c_2)$$

This is useful for inter-temporal decisions, e.g. consumption today and consumption tomorrow

そして利他的ということについて，シンプルな経済学的な選択肢で考えてみたいと思います。経済学部生であれば，誰でも見たことがあるような形で表してみたいと思います。スライド 6 では効用関数，そして予算制約があります。個人は選択をしなければならない 2 つの消費財がありますが，どのくらい消費をするのか，それから価格，P_1 と P_2 というベクトルがあって，どのくらい消費するのか選ばなければなりません。それから所得があります。自分の趣向の下で厚生が最大になるようにしなければなりません。予算制約がありますけれども，この 2 つの消費財の消費で効用を最大にするというもの，これが典型的な経済学の問題です。基本の中の基本の問題です。

ただ，場合によっては効用は分けることができるという考え方もあります。ある財の 1 の消費，それから財の 2 の消費によって得られる幸せ，この 2 つを合わせることができるという形で効用を分けて考えることができます。それが最後の式で示されています。C_1 と C_2 から得られる効用というのは，その 2 つの効用を足したものととらえることができます。

またスライド 7 では異時点間の決定があります。消費をするのか貯蓄をするのかということについて手続き的な，あるいは理念的な問題があって，このようにとらえています。あまり詳しくは立ち入りませんけれども，現在の消費に対する重み付け，それから将来の消費に対する重み付けがあります。

C_1 と C_2，現在の消費と将来の消費が考えられます。子供にとっては C_1 の消費，現在消費するのか将来消費するのか，そして本来的な好みとしては，どちらを好むのか，現在の消費と将来の消費について検討します。単に財の消費だけではなく，効用関数で考えられるのはほかにも考えることができます。家族経済学の分野では違った考え方をしがちです。つまり，どのくらいの努力を親が行うのか。子供たちを幸せにするために，子供たちを金持ちにするために親がどのくらいの努力

スライド 7　The Economics of Parenting Styles

However, we can also have other objects inside the utility function:
Consider a child (CH) deciding between study effort today ($\boldsymbol{e}$) and future success as an adult ($\boldsymbol{s}$)

$$U^{CH} = u^{CH}(T-e) + \beta^{CH} u^{CH}(s)$$

Parents derive utility from their own success s^{PAR} and from their children's utility

$$U^{PAR} = u^{PAR}(s^{PAR}) + \lambda U^{CH} = u^{P}(s^{P}) + \lambda[u^{CH}(T-e) + \beta^{CH} u^{CH}(s)]$$

If parents are **paternalistic**, they judge their children's success with their own discount factor $\boldsymbol{\beta^{PAR}} > \beta^{CH}$

$$\boldsymbol{U^{PAR}} = u^{PAR}(s^{PAR}) + \lambda U^{CH} = u^{PAR}(s^{PAR}) + \lambda[u^{CH}(T-e) + \boldsymbol{\beta}^{PAR} u^{CH}(s)]$$

をするのかといったようなとらえ方をします。

違った問題を設定してみましょう。現在勉強するという努力をする e，それから将来の成功，成人したときの成功を s とします。これは時間の関数で，今日努力をしなかった場合，レジャー，娯楽で過ごした場合，T というのは寝ている以外の全部の時間です。個人が過ごす時間。そして e というのが勉強に費やす時間です。若い人にとっての楽しい時間というのは勉強をしていないとき，ほかの時間だと思います。T マイナス e です。インターネット，オンラインサーフィンをしたり，友達と会っているときが楽しいでしょう。それから β（ベータ）という因数があります。そして将来の成功という効用があります。トレードオフですけれども，より現在努力を多くすればするほど，現在の効用が減る。娯楽という効用が減る。しかし将来の効用は増えるという投資の決定のようなことをしなければなりません。

親の目から見たらどうなるでしょうか。親は 2 つのことを心配しているとしましょう。親自身の成功について。これは S^{PAR}。それからまた子供の効用（幸福）についても λU^{CH} という形で一定の重み付けがされています。そして子供が幸せになることを見ることによって効用が得られる。2 つの効用が親にはあります。ゲーリー・ベッカーなどがこういった問題を取り上げました。この λ というのは係数であって，世代間の利他主義の係数です。

それでは，親がパターナリスティックだったらどうなるでしょうか。親がパターナリスティックであると，その理由付けはこの 2 行目のようなものになります。家父長的であるというのは，子供の将来を考えてのことだったらどうなるでしょうか。子供の β を子供自身の効用関数の中には入れません。そして β をより大きくしようとします。親の β の方はより大きくなります。子供の β よりも親の β は大きくなります。そうするとこの 3 行目のような形になります。そして対立があって，子供の選択肢，これはより小さな β に基づいている。つまり将来志向が少ない。そして親はもっと将来志向が強いということになります。子供にももっと明日のこと，将来のことを考えてほしい。

今子供が考えているよりももっと将来のことを考えてほしいと親は考えます。家父長的である親は，子供に対して違った行動を取らせようとします。子供の自然の本能でやろうとするよりも違ったことをさせようとします。

何ができるでしょうか。2つのことができます。まず強制することができます。強制をする，つまり子供に対して，「あなたは今日楽しみたいかもしれない。でも，今日楽しんだらあなたを部屋に閉じ込めます」と。e は小さい。でもそれは，e は小さいことを子供は受け入れなければいけないと親が強制するものです。つまり，選択肢を限定してしまうのです。親の方が，こうしてほしいと好むことだけしか選択肢として子供に提供せず，それ以外のことは禁止するのです。例えば先ほど主教のように，従わなかったらお仕置きをしますという形です。

それから，経済学的な伝統的な考え方とはちょっと違いますけれども，次の考え方は子供の思考を形成しようとする，子供の考え方に影響を及ぼそうとすることです。つまり，子供に対して話をして，そして子供の β について，親の β のとらえ方と同じような β のとらえ方に，子供を説得し，納得させるということです。将来の方が重要なのだと。子供が今考えているよりも将来は重要なのだということを説得しようとする。それが権威型の子育てです。子供の思考に対して影響を及ぼそうとするというものです。

それから3つ目の考え方の迎合型。これは，子供の好きなようにさせましょうという考え方です。子供はそもそもあまり忍耐強くないのだから，子供の考えるがままにさせようと。こちらの母親は，子供は何をやってもよいと。子供の奴隷になってしまっています。そして迎合型の親の子育ての結果，子供は大人のような子供になってしまう。オタクのような子供になってしまいます。

それでは，複雑なものを飛ばして，ある子育てスタイルを取ったらどうなるのかということを見てみたいと思います。より専制型の子育てスタイル，利他的な子育てスタイルと子育てスタイルに違いはありますけれども，みんな同じようにパターナリスティックな親であると仮定しましょう。そして，それでも経済的な環境によって影響を受けます。場合によっては，子育てスタイルのあるスタイルを取ることのコストがとても高くなるかもしれませんし，また別の状況では，ある子育てスタイルの便益が大きくなったり，小さくなったりします。環境によって大きくなったり，小さくなったりします。経済学での比較研究を行ってみたいと思います。社会条件が違った場合に，同じ親であってもどのような行動を取るのか。社会環境が違ったらどういうスタイルを取るのかということを検討したいと思います。

異なる環境を見てみたいと思います。考えてみてください。マティアスの子供たち，イリノイ，エバンストン生まれです。シカゴの少し高級な郊外です。親が心配しているのは，十分努力をしなければ子供たちが責任を持って，そして将来思考的な考え方を持つように育てなければ，アイビー・リーグの大学とか，あるいはノースウエスタン大学などには入れないということです。こういった親にとって，失敗のコストは非常に機会の大きい大学に入ることができないことであるととらえて

います。

では一方で，1950 年イタリア北部の農地，農山村においてはどうでしょうか。子供は親と同じ仕事に就こうとしていました。それで，子供に対して，例えば勤勉とか，あるいはすごく努力をするということを伝えることは重要ではなかったわけです。子供を直接モニタリングしていればよかった。監視していればよかった。必ずしも学校は都会にある学校に行かなくてもよかったわけです。

では今度は，アメリカの比較的貧しいセントルイス東部ではどうでしょうか。ここではアイビー・リーグの大学に入る可能性というのは残念ながら非常に低い。どちらかというと，子供たちが危険な活動に加わるのを防ぐということが親にとっては重要でした。ストリートギャングとかドラッグなどです。

このように，さまざまな要素が親の子育てスタイルの選択に影響を及ぼします。そのうち特に重要と思う 2 つに注目をしたいと思います。1 つは教育からの収益率，そして社会における賃金格差という話です。スカンジナビア諸国のように経済の不均衡があまりない国での課題は，例えばアメリカなどで育つのとは異なってきます。そして日本とか中国もまた異なる社会です。中国は日本に比べてかなり格差のある社会であると言えます。

そして 2 つ目の側面として私たちが重要と思っているのが，社会的地域の移動，そして労働移動，あるいは現職にとどまることからの収益率と呼んでいるものです。伝統的な社会というのは親が子供に自分の職業を教えます。例えば農業，あるいはアルチザン。あるいは私の両親の場合には，州のテレビ局で技師をしていました。そしてその州のテレビ局で働いている人の子供たちを入社させるというようなトラックもありましたので，そういった職，同じ仕事に就く可能性も高かったということです。家族の中で代々同じ仕事に就くということは，公的な教育を通じて学ぶというのではなく，親から学ぶことが多かったと言えます。

あるいは日本の農村部から東京に来る。あるいは東京でアパートに住む，あるいは寮に住むということになりますと，モニタリングされることはなくなります。例えば私のボローニャの例ですけれども，郊外から出てきて大学に入った人は，自分自身で自分を管理しなければいけない。これはかなり大変そうでした。うろうろして楽しんでしまう，遊んでしまうことがよくありました。7 年，8 年，あるいは 9 年かけて大学を卒業するという例もそういう場合には多かったわけです。

つまり，教育からの収益率，そして社会的地位の移動や労働の移動，これは親の子育てスタイルとも関係しているということです。最近はこの流れも変わってきました。世界的に見て傾向として言えるのが，ほぼすべての先進諸国，そして途上国あるいは新興諸国においても言えることですが，変化は必ずしも平等に同じではありませんでした。日本とアメリカを比べますと，日本の場合トップ 10％の平均所得を一番下の人たちと比べますと，1985 年から 2009 年にかけて 8.6％から 10.7％比率が広がりました。しかしアメリカの開きはさらに大きく，10.8％から 16.5％となっています。ジニ係数は両国において伸びました。そして，その国の中で最も所得の高かった層 1 ％の所得の比率

は，日本の場合７％から9.5％に増えたのに対して，アメリカの場合は倍になりました。こういう状況が，すなわち不平等というのが世界各地で広がってきました。必ずしもそのスピードは同じではありませんでしたが，不平等が広がっています。

そして，ここで見たいのは，時代を経ていかに子育てスタイルは変わってきたのかということです。伝統的な世界において，現職にとどまる収益率が高かった場合には，親は専制型の子育てを行います。直接子供に対してコントロールすることができたからです。しかし技術が変わってきました。そして現職にとどまることによる収益率は下がっていきました。まさに家で技術を得るよりも，公的な教育を通じてスキルを身に付ける方が高くなってきました。これによって迎合型の子育てが高まっていきました。

しかし，そこからまたさらに変化の流れがあり，経済的な格差が生まれたこともあり，社会がより競争的になっていき，親も子供に対して成功するようにプレッシャーを高めていきました。それまでのようなやり方ではなく，権威型になっていきました。子供が大学に行ってからも，親の目がなくてもちゃんと取るべき行動が取れるように権威型になっていきました。

このように時間の経過とともに親の子育てスタイルは変わってきました。しかしそれだけではなく，国によっても違っているということが言えます。いくつか図をご覧いただきたいと思います。国によって違います。それぞれ不平等性が異なる国々をご紹介します。2005年の状況です。

まず不平等を何で測るか。ジニ係数で測定をします。ジニ係数が高ければ不平等が高いということになります。そして，世界価値観調査を基にまた別の予測もしたいと思います。世界価値観調査は文化的な側面に関心を持つエコノミストがよく使う調査ですが，多くの質問項目に答える内容となっています。私たちが関心を持っていますのが，親が何を最も重要な価値観として子供が吸収すべきと，あるいは子供が持つべきと考えているかどうかということです。親にとって子育ての中で子供が持つべき価値観として何を大事と考えているのか。この２つの調査を基に予測をしてみたいと思います。

なぜ中国とノルウェーの親は異なる信念を持っているのか。ノルウェーの場合には，子供にストレスをかけるべきではないと考えます。子供は自然との接点をたくさん持つべきで，たくさんスポーツをし，そして楽しむべきである。そして独立して物事を考えることができるようになるべきであると考えます。中国の場合には，ありとあらゆることが学術的な成功と，そして努力とつながるべきであると考えています。これがどの程度ステレオタイプなのか，それともデータの中から分かることなのかをこれから見ていきたいと思います。

３つの測定をします。世界価値観調査の中で私たちが注目をしたのは，この３つとなります。というのも，今話題となっている子育てに直結していると考えられるからです。子育てにおいて一番重要と思うものはどれですか。２つ以上選択することができます。その中で，想像力はどれくらい重要と考えるのか。また独立がどれくらい重要と考えるのか。そして勤勉がいかに重要と考えるのか，

これらを見ていきたいと思います。勤勉（ワーキングハード）はどちらかというとプッシーな，厳しい親ということになります。教育ママとか，あるいはタイガーマザーといった傾向になります。どちらかというとノルウェーの親というのは，子供はあまり親が介入すべきではないというだけではなく，子供というのは自分の得意なものを自分で気付くべきである。そして子供の特性も気付くべきであり，親が介入すべきではない。例えば想像力とか独立というものを重要視するのがノルウェーの考え方です。

こちらのスライド 8 が OECD 諸国の調査の結果となっています。ロシア，中国，セルビアなどは，ご覧のように非科学的な理由ではありますけれども，というのも，私はこういった国々で調査の報告をしているということで取り上げています。そして横軸にジニ係数があります。これが不平等です。そして縦軸に勤勉さを重要だと主張した親の割合を示しています。

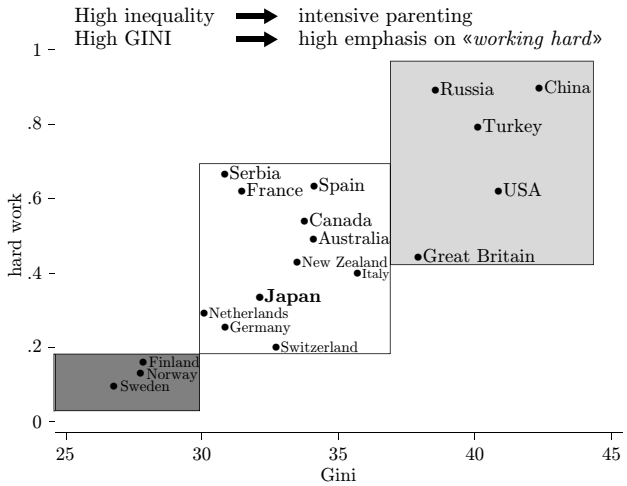
ご覧のようにスカンジナビア諸国というのは，勤勉はそれほど重要ではないと考えています。私自身 7 年スウェーデンに住んでいましたが，実際にそのように考えていました。子供にストレスを与えるべきではないと考えていましたし，評価というのも好みません。数字的な評価で子供を評価するというやり方，例えば高校では 3 年間評価されるけれども，それ以前はそういった評価の仕方はされません。非常にリベラルな子育ての文化となっています。日本は真ん中です。ご覧のように両方の意味で真ん中にあります。日本の保護者は理想的なバランスを示していると思います。一方中国，ロシア，米国というところでは，より勤勉さを重要視していると言えます。

スライド 9 の独立ということになると逆になっています。不平等でない国，スウェーデン，それからドイツ，オランダなどでは独立を重んじています。イギリス，アメリカ，ロシアなどではそれほど重視されていません。それからアジアの親は，独立を重視している。典型的な欧米人よりも重視しているということが反映されています。中国は不平等が大きい国ですけれども，独立を重視しています。日本はそれほど大きな外れ値ではありませんけれども，ほかよりも高くなっています。それから逆にフランス，スペインは独立をあまり重視していません。しつけなどをもっと重視していて，独立はあまり重視してないということが別の調査でも示されています。

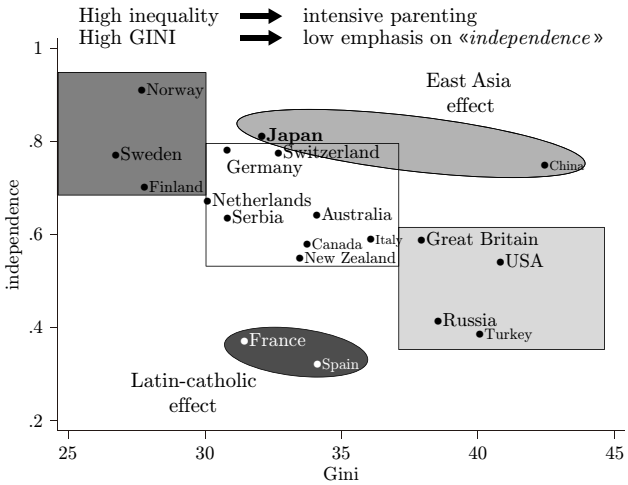
3 つ目のスライド 10 の，イマジネーション（想像力）を見て私はちょっと悲しくなりました。というのも，私はイタリア人です。イタリアはいろいろ有名な芸術家を生み出した国ですし，歌手なども輩出をしている国なのですけれども，どうもイタリアの親は想像力をあまり重要ではないと考えているようで，イタリアはマイナスの方の外れ値になっています。ただこれはやはり一貫性があって，先ほどのものと同じようなパターンになっています。不平等が小さい国は想像力を重視している。不平等が大きい国は重視していないということが見て取れます。

このスライド 11 では，これまでの情報をまとめて 1 つの変数にしようとしました。これはいろいろなものを組み合わせています。独立について，それから想像力については正の数。それから勤勉と節約と負の数になっています。そして不平等との関連を見ようとしています。GDP でコント

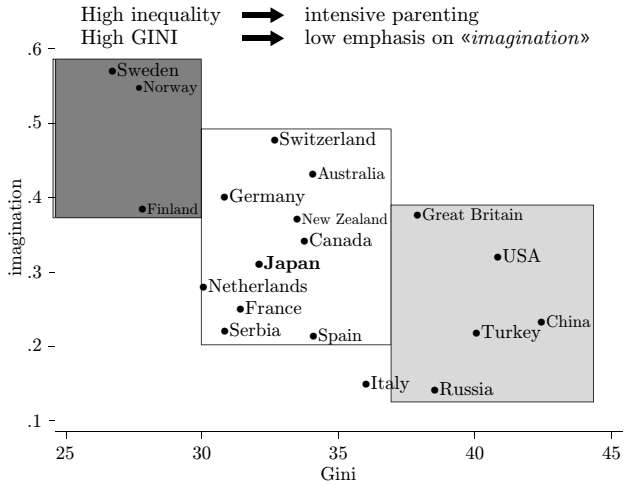
スライド 8



スライド 9



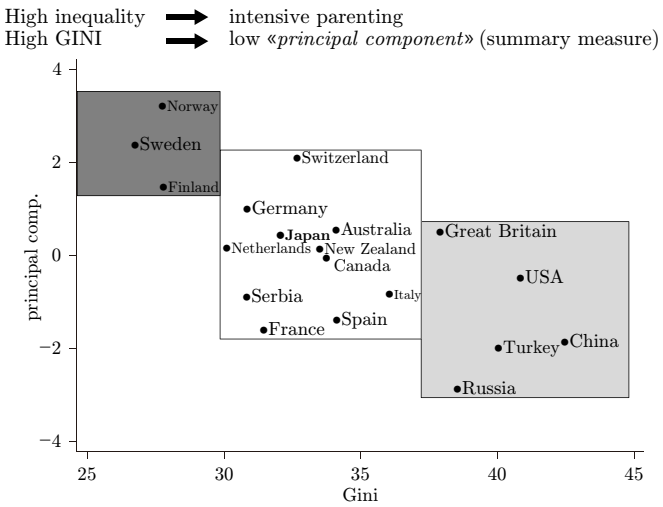
スライド 10



スライド 11　Principal Components of Parenting Values

Principal Component	1	2	3	4
Loading on Independence	0.55	−0.19	0.79	−0.17
Loading on Imagination	0.58	0.24	−0.18	0.75
Loading on Hard Work	−0.58	−0.15	0.51	0.62
Loading on Thrift	−0.13	0.94	0.28	−0.13
Percent of Variance Explained	0.64	0.26	0.07	0.03
Correlation with Gini Coefficent	−0.69	−0.07	0.17	0.52

スライド 12



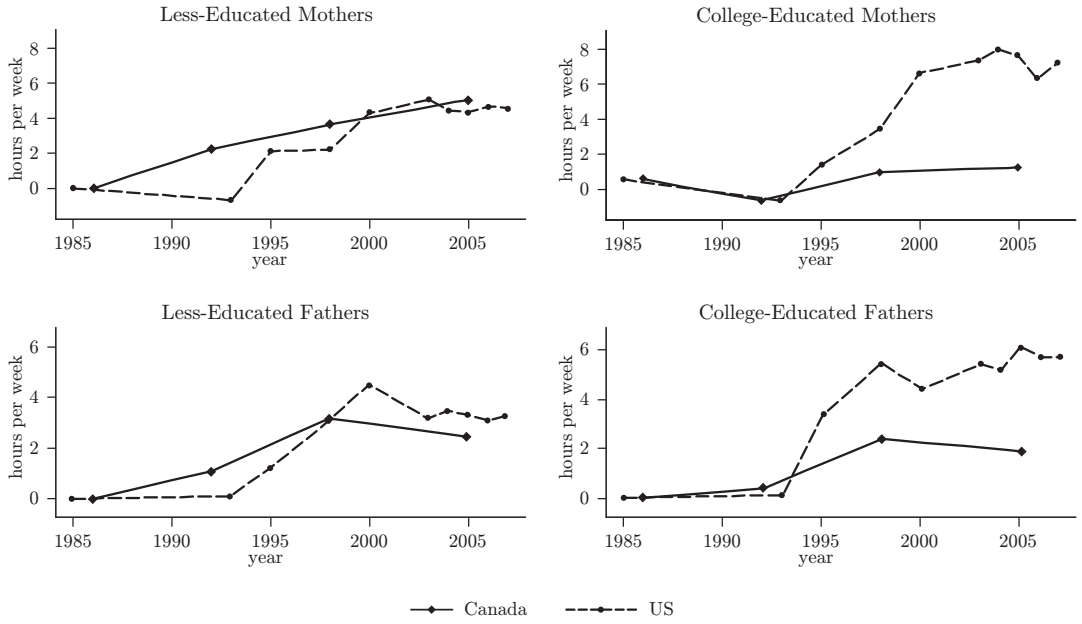
ロールしても変わりはありません。

結果としては，スライド 12 のようによりコンパクトにまとまっています。スカンジナビア諸国，それからスイスもそうですけれども，最もリベラルな親で，子育てがより自由放任主義である。そしてロシア，中国，それからアメリカなど不平等がより大きな国では，この主成分が低い状況になっています。それが国ごとの比較の状況です。

それでは最後に，社会経済グループが異なっている場合の子育てスタイルはどうなのかというのを見ていきたいと思います。違いというのは単に国の間の違いだけではありません。それから不平等か，平等であるのかという違いだけではなく，社会経済的なグループ，違ったグループがどのように子育てに対応しているのか，不平等あるいは格差が広がっている中でどう対応しているのかということを見たいと思います。

モデルを作りました。正式な論文の中にはそのモデルも記してあります。権威型の子育ては，スキル・能力が必要である。そしてしばしばお金が必要である。例えば課外活動を子供に受けさせるためにも努力は必要ですし，お金も掛かります。また子供に対して話をする，説得をするというこ

スライド 13　Recent Trend in Parenting, Canada versus United States (Ramey and Ramey 2010)

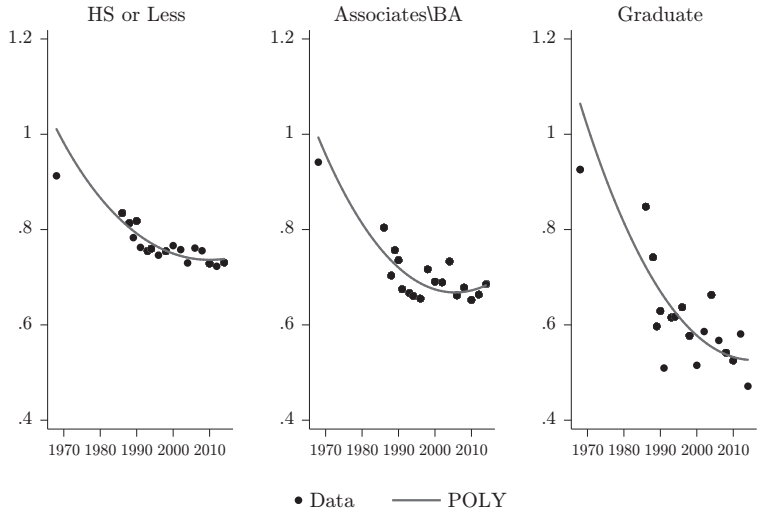


とも努力がいります。また，子供の仲間とは違う考え方を取らせなければいけないということはとても微妙な説得力を必要とするでしょう。そして子供に価値観をはぐくませなければならない。勤勉でありなさい。それから勉強するという価値観をはぐくむということでスキルも必要になります。

回答は親によって違う。教育水準が違えば，それから所得水準が違えば違うだろうと考えました。学歴が低い親の場合，これはもう率直に，単刀直入に申し上げますと，専制型であるか，迎合型であるかの選択肢しかありません。権威型であることは，あまりうまくできないからです。

このスライド 13，14 で最近の子育てのトレンドを見てみますと，これは二次元で比較を行っています。まずカナダとアメリカとの比較を行っています。アメリカの方が格差がカナダよりも広がっています。より不平等になっています。また，子育てにかける時間はアメリカの方がカナダより多くなっています。また，それ以外の違いもあります。学歴が低い親，それから大学歴のある親を見てみますと，アメリカは点線です。そして 1 週間当たり子育てにかける時間が増えています。教育水準が低い母親，それから大学教育を受けた母親でも子育てにかける時間は増えていますが，大学教育を受けた母親の方がより多く子育てに時間をかけています。これはマイナスになることはあり得ないからチェックしなければいけないと言われることがあるのですけれども，これはレイミー，レイミー（Ramey and Ramey）の 2010 年の研究から取ってきた数字で，これはちょっと表現が誤っている。マイナスにはなっていません。そして教育水準が低い父親と大学教育を受けている父親でも同じパターンです。そして中流階級のアッパーミドルクラスの方がより子育てに時間をかけています。

スライド 14　Recent Trend in Spanking in United States by Education

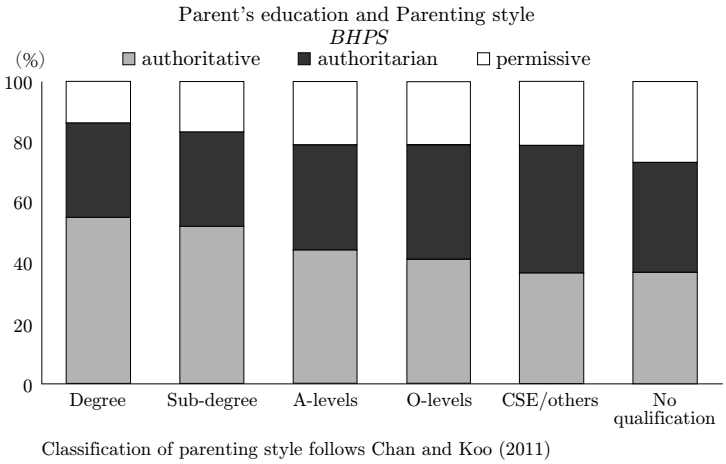


またこのスライド 14 で，トレンドとして，より教育水準が高い親のとらえ方，体罰について，お尻をたたくというようなことについてどうとらえているのかですけれども，1970 年代に立ち返りますと，アメリカ人のほとんどすべてが体罰は問題ないと考えていました。教育水準の違いはありませんでした。教育水準が違っていてもこの考え方は違っていなかった。90％以上が体罰というのはよいしつけの方法だと考えていましたが，その比率が下がってきています。ヨーロッパ人から見るとショッキングなほど高い。体罰を認めている率が高い。ヨーロッパ人は，子供はお尻をたたいたり，体罰をするべきではないと考えている。アメリカ人はそうではないということですけれども，大学卒の学歴がある場合には体罰はよいと考える率がより低く，50％未満になっています。そして教育水準が低い親の場合には，現在でも体罰を認めるというのが 75％ぐらいになっています。

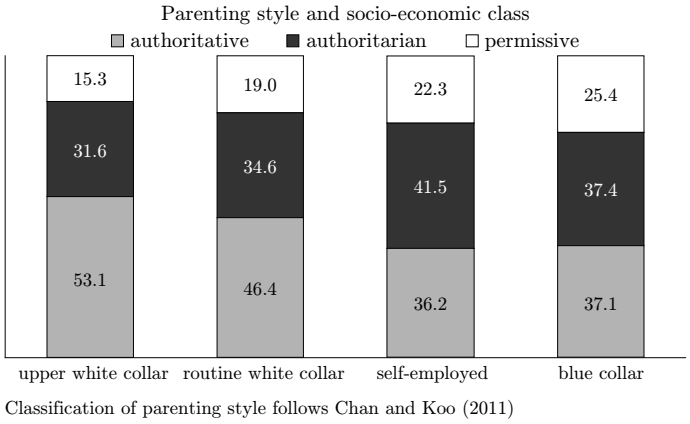
それではアメリカを離れて，次にスライド 15 でイギリスを見てみましょう。ここでは分類をして見ています。権威型，専制型，迎合型というふうに分類しています。2 人の発達心理学者，T. W. チャン（T. W. Chan）と A. クー（A. Koo）の分類にのっとっています。そしてこの横軸ですけれども，イギリスの教育水準，ディグリーというのは最も教育水準が高い。そして一番右側のノークオリフィケーションというのは教育水準が一番低い。そして縦の棒の高さがどのくらい権威主義的であるのかということです。青い権威主義的である，これは教育水準が高いほど権威主義的な子育てスタイルが増えており，そして教育水準が低い方が専制型，自由型が増えています。

これはスライド 16 で職業別で見ても同じようなパターンが見て取れます。本当はもっと職業の細かい分類があるのですが，ステータスでこのように分類しています。同じような職業についてまとめています。一番左側が地位が最も高い職業，アッパーホワイトカラー（上流ホワイトカラー）としています。ホワイトカラーで所得が高い層。それからルーティンホワイトカラー（通常のホワイト

スライド 15　Parenting style and parents' education in the UK



スライド 16　Parenting style and parents' occupation in the UK

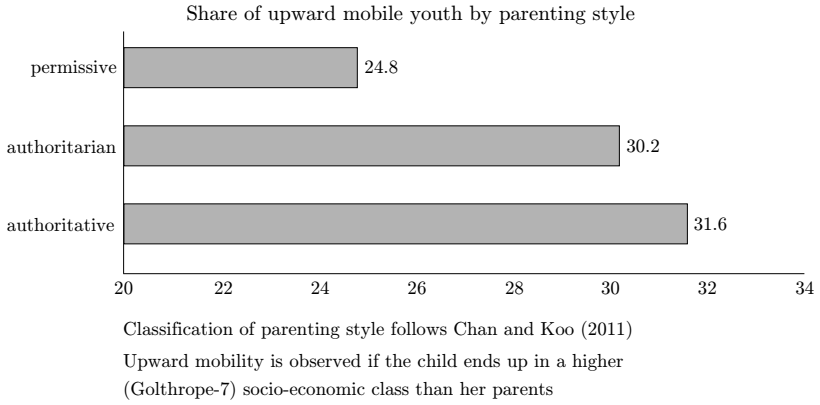


カラー)。それから自営業者，そしてブルーカラーとなっています。

権威型の子育てというのは，職業上の地位が高い人では比率が高くなっています。また面白いことに，自営業を見てみると，専制型の子育てを認めている率が高い。ブルーカラーよりも高くなっています。これは，自営業の人たちは期待感としては子供たちが親の仕事の跡を継いでくれると考えている。したがって，現職にとどまることの収益率が高いという考え方を取っていることの現れと受け止めることができます。

また，スライド 17 は子育てスタイルを自由放任主義，専制主義的，権威主義的に分類するのであれば，そしてイギリスの世帯パネル調査のデータを使いますと，子供が大人になったときまでトラッキングをしていくことができます。そして親のステータスと子供のステータス，社会的な地位を見ることができます。職業的に親の地位よりも高い地位の職業に就いているのかどうかというこ

スライド 17　Parenting style and parents' occupation in the UK



とを見ることができます。権威主義的な親は，ほかの社会的な状況などについて調整しても，上昇移動が子供によってもっと見られる。親よりも社会的により高い地位に子供は就いているという結果になっています。権威主義的な子育ての方が成功すると言えるかもしれません。あるいは親の期待を反映しているのかもしれません。親がより野心的であると，権威主義的な子育て方法を取るということなのかもしれません。

それでは，そろそろまとめに入っていきたいと思います。少し憶測になるかもしれませんけれども，この子育てのパターン，あるいはトレンドが将来の社会にどのように影響を及ぼすのかということについてです。アメリカやヨーロッパでも大変話題になりました，トマ・ピケティの『21 世紀の資本』などの本があります。格差が劇的に拡大していると取り上げています。政治的な考え方もあって賛成する人も，賛成しない人もありますけれども，それほど論争を呼ぶような内容ではないと思います。

では，私たちの分析が正しいとすればどうなるでしょうか。私たちの分析が示唆しているのは，インテンシブな子育てはいろいろな理由によって行われている。しかも，権威型の子育てを行う親は教育水準も高くて，所得も高くて，それを行うことができる親であるということが示唆されています。

スイスの場合には，ギムプリュフングとドイツ語で呼ばれている高校の入学試験がありまして，この試験に合格できるように親がかなり子供たちのことをサポートします。これは合格率 50%という試験です。そして，より高い教育を受けている親は子供のことを助けることができますし，教育水準が低い家庭であれば入試すら考えないというようなものです。

何が起こるのか。いろいろな理由から，そして例えば R. D. パットナム（R. D. Putnam）の最近の本もありますけれども，最近の研究によりますと，アメリカにおいてはあたかも二極分化が起こっている。そしていろいろなメッセージ，それから環境的な状況で金持ちと貧しい人と，1950 年代のような形の二極分化が起こっていると。パットナムによりますと，1950 年代に子供たちが受け止め

ていたインプットは現在のものと似ている。それから，社会的な地位が違っている家庭での子供の行動，50 年代はどの家族も似ていたけれども，今は違いが増えてきている。そしてどのような扱いを子供が家庭で受けているのか。どのようなインプットを子供が家庭で受けているのか。50 年代は画一的だったのに今は変わってきていると言っています。そして，将来それがさらなる不平等につながっていく。そして，それが自己持続的なメカニズムになってしまい，不平等がさらなる不平等を生み出していく。そしてアッパーミドルクラスはインテンシブな子育てをすることができる。そういったことができない人たちは，より貧しくなっていくという不平等が拡大すると言っています。

このようなメカニズムがあるのかどうか。これは政策立案者ももっと注目をして，そしてそれに対して介入をする必要があるでしょう。単に格差を縮小しようとするだけではなく，機会の不平等についてより注視するべきでしょう。

それでは締めくくりたいと思います。子育てのスタイル，どのようなスタイルを選ぶのかということ。これはいろいろな理由がありますけれども，経済的な理由によっても選ばれています。そして親が子育てのスタイル——これは意識的に選んでいるわけではなく，一部は無意識に選んでいるかもしれませんけれども——費用便益を評価して子育てスタイルを選んでいる。ですから，マティアスの親や私の親はあまり子供に対して成功するようにということを強くプッシュしなかった。私たちの世代の方が子供にもっとプッシュをしているということも，そのためかもしれません。実証的なデータが OECD 諸国からありますけれども，またナラティブを見てもこのような考え方と一貫しているようです。

それから最後に，不平等，それからインテンシブな子育てスタイル，これは悪循環につながる可能性がある。そして，いずれさらなる不平等につながる可能性があると考えています。

要旨: 心理学で子育てスタイルを専制型，迎合型，権威型の 3 つに分ける考えがある。専制型の親は子が議論せずにルールに従うことを求めて不服従を罰する。迎合型の親は子にすべてを自由に決めさせる。権威型の親は子が議論することを許すが子に影響を与えようとする。ジリボッティ教授はどのような経済条件で親がどの子育てスタイルを採用するかを決定するかについての理論を構築し検定する。彼は多くの国々での趨勢は，経済不平等の拡大とそれに伴うより大きな人的資本の収益率により，子の経済的成功のためにインテンシブな権威型の子育てスタイルを採用する親が爆発的に増えていることを示す。日本のように経済不平等が比較的に小さい国では親はもっと迎合的である。ジリボッティ教授は世界価値観調査の国際的なデータから理論に整合的な実証結果を示している。

キーワード: 家族利他主義，人的資本，不平等，世代間選好移転，子育てスタイル，パターナリズム，世界価値観調査

ファブリツィオ・ジリボッティ（**Fabrizio Zilibotti**）教授　略歴

1994 年　ポンペウ・ファブラ大学助教授　1997 年〜1999 年　同 大学准教授

1999 年　ストックホルム大学上級研究員　2001 年〜2002 年　同 大学教授

2002 年〜2003 年　ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン

2003 年〜2006 年　ストックホルム大学冠講座教授

2006 年〜2017 年　チューリッヒ大学教授冠講座教授

2017 年〜　イエール大学冠講座教授

主　要　論　文

Song, Zheng, Kjetil Storesletten, and Fabrizio Zilibotti, 2011. “Growing Like China,” *American Economic Review*, 101(1): 196–233.

Matthias Doepke and Fabrizio Zilibotti, 2008. “Occupational Choice and the Spirit of Capitalism,” *The Quarterly Journal of Economics,* 123(2): 747–793.

Matthias Doepke and Fabrizio Zilibotti, 2017. “Parenting with Style: Altrusim and Paternalism in Inegenerational Preference Transmission,” *Econometrica*, 85(5): 1331–1371.

日本語版調整

大垣昌夫